



みわたせば西も東もかすむなり君はかへ  
らずまた春や来し

この美しく匂やかな歌は、大正期の女流歌人九條武子の代表歌のひとつとされています。第一歌集『金鈴』(大正九年)の中の一首ですが、この歌ににじむ典雅な調べと憂愁は、読者にはそのまま九條武子の象徴のように思われたでしょう。

昭和に入って間もなく逝去した九條武子の名が「美人薄命」の代名詞のように言われたのも、そう遠い昔ではありません。その美貌、高貴な生い立ち、結婚生活の不幸な影、死に際しての見事さなどが、世の人々の心を捉えてはなしませんでした。

武子は明治二十年(一八八七)十月、京都の西本願寺、いわゆる「お西」の末子として誕生しました。父は本願寺二十一代法主の明如上人大谷光尊で、周囲からは武子姫と呼ばれる境遇だったのです。武子は京都師範の附属小学校へ、一里ほどの道を、人力車にのり友

# 九條武子

尾崎左永子



幼少のころ

禪ちりめんの袖に稚児まげ  
姿で通学しましたが、十二  
歳の夏、好きな学校もやめ  
させられ、あとは、当時深  
窓の令嬢の多くがそうであ  
ったように、家庭教師によ  
って教育されました。

その人並みすぐれた美し  
さと才華は、信徒たちの憧憬と尊崇の的であり、厳格な父君も武子  
を破格に可愛がり、病氣療養中の伏見桃山の別荘に共に住まいまし  
た。十三歳のころにはシャム(現・タイ王国)皇太子との縁談が進  
みましたが、父の逝去もあって沙汰やみになりました。法主を継い  
だ兄の大谷光瑞は、やがて東本願寺の連枝(一族)に武子を托すこ  
とを考えますが、西本願寺から東本願寺へ人氣が移ってしまうこと  
を怖れた重職たちの反対があつて、これも成立しませんでした。そ



良致・武子夫妻(左)、光瑞・籌子夫妻(右)

れほど、若いころから武子は人々のアイドル的存在だったのです。

こうして、当時としてはかなり晩婚の二十三歳で九條良致男爵の妻となり、新婚旅行を兼ねてロンドンへ出立しました。九條良致は

五撰家の九條公爵家の分家で、明治天皇の後、貞明皇后の甥に当り、新法主大谷光瑞の妻、籌子裏方の実弟でした。当時、廃仏毀釈の流れがまだ強く残っていて、仏門は何処も経営がたいへんでしたが、光瑞は非常に事業的な広い視野をもっており、この時も義弟の九條良致に、新しい事業の視察のためロンドンに留学させたとはいわれます。見送り旁々、兄嫁籌子夫人も同行しますが、ロンドンについてまもなく、武子は、籌子夫人共々、帰国して来しました。そしてそれ以後、十年に亘って、孤闘を守ることになるのです。

仲の好かった義姉籌子夫人も、帰国後間もなく逝去し、武子は籌子夫人の遺した仏教婦人会を守って、全国の巡回をはじめます。まだ二十代半ば、武子の行く先々には、熱心な信徒たちが待ち受けていました。そしてこの活動は、兄光瑞が法主を引退したのちも、死の直前まで続けられたのでした。

その間、武子は佐佐木信綱の主宰する短歌結社「竹柏園」に入り、「心の華(のちの心の花)」に「秋の夜」の筆名で歌作を発表しはじめます。当時、常識破りの新しい短歌「明星」派の勢いはすでに衰

えはじめていて、新しい写真派の「アララギ」が台頭していましたが、「心の華」は国学系の伝統を守りながら漸進する形をもっていたため、上流階級の教養的な和歌の技法を持つ人々にも、近づき易い面があり、佐佐木信綱はよくこれらの人々を迎え入れていました。武子のみならず柳原白蓮もまたその一人です。

『金鈴』刊行は大正九年六月でしたが、

緋の房の襖はかたく閉ざれて今日もさびしく物おもへとや  
もとゆひのしまらぬ朝は日ひと日わが髪さへもそむくかと思ふ  
わが胸にかへらぬ人かあまりにもはかなし  
声もまぼろしもなき  
書く人もいふ人もはた咎はあらずものがたりめくわが宿世ゆる



若き日

などの歌が、薄倅の佳人のイメージをいやが上にも人々に印象づけました。

実際、世の人々は「ものがたりめく」佳人の「宿世」に同情し、想像し、感激したのでした。そのぶん、武子には一種の「美人薄命伝説」のようなものがつきまとい、人気のわりには歌をあまり評価されることがなかったようです。しかし、現代の眼からみても、かなり个性的で鋭敏な歌がいくつも混っているのに注目したいのです。

生るるも死するも所詮ひとりぞとしかおも  
ひ入れば煩惱もあらず

たたけどもたたけどもわが心しらずピアノ  
の鍵盤は氷の如し

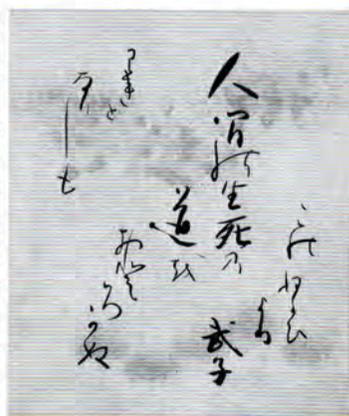
初夏は春よりもなほ独居のほとほとつらく  
むねにせまり来

満身の血潮の冷えて閃くは氷のごとき理の  
刃のみ

与へられし氷の室の上にしてくすしや此身  
焰ともゆる

ここには「氷」という語の使われた作を中心に摘録してみました  
が、その感覚の確かさに驚かされます。今から八十年ほど昔の歌と  
は思えない鋭さがあるのです。自らを率直に見つめる力を、武子は  
十二分に具えていて、現代的な所があるのです。

『金鈴』刊行後、半年して、夫の良致男爵は、十年の滞英生活を打



直筆色紙 人間の生死の道をおどろかぬわ  
れとなりしもこのねが(願)ひより

ち切って帰国して来ます。その間、イギリス人の現地妻との間に子までなした九條男爵でしたが、祖国の人々からの強い要請に、帰国を決意したのです。そこには『金鈴』の評判によって、男爵の立場をこれ以上悪くしたくない人々の意志が働いたのだともいわれています。

十年の別居、それは生易しいものではなかったでしょう。それ以上に、十年別居後の同居は、もっと容易ではなかったと思われます。思い出そうとしても「声もまぼろしもなき」状態。恨みごころからようやく「ひとり」の吾を見据えて、自らの存立を克ち取って行った十年。

### 幸うすきわが十年のひとり居に恋しきものを父とし答ふ

と歌い、決して「夫」の不在を寂しいといわなかった武子なのです。その後、武子の文名があがるにつれ、良致の存在は淡い影のようにしか見えなくなります。

武子が生前に出した歌集は、この『金鈴』一冊で、他に随筆や歌、戯曲などを集めた『無憂華』が、死の寸前、昭和二年七月に刊行されているのみで、歌集『薰染』『白孔雀』は、没後に編まれたものです。



関東大震災（大正12年）の被災者に救援。

『無憂華』は仏教雑誌などに発表された文章を中心に編まれ、その多くは随筆ですが、歌日記や短歌とともに、戯曲「洛北ろくほくの秋」も収められています。この戯曲は帝国劇場で上演されて好評を得たもので、岡本かの子はこれに刺戟されて戯曲に手を染め、やがて小説に自らの活路を見出したのでした。武子は戯曲以外にも、舞踊曲「四季の曲」の作詞構

成も手がけていて、当時のNHKラジオで放送されるなど、幅広い分野で創作活動をしなが、一方では関東大震災以後はとくに貧民救済や児童愛護に力を注ぎ、全国を回って布教活動を精力的にこなしています。そのために過労で倒れることもありました。

夕べせまる防雪林のうすやみにましろくた  
かき山うどの花  
救はれしもの、やうにも車よりおりたちて  
人ら顔あらひをり  
神のものか人のものはしらなくにすなほ  
なり汝なは羊とうまれ

などは、布教巡回中の北海道での作ですが、世間の人々が思うような、単に美しく気高いお姫さまではなく、しっかりした宗教観、自然観をもち、人々に手をさしのべ、身を惜しまず働く、使命感のつよい人でもあったのです。

ある時、大陸浪人のような男が押しかけて来て金品を強要したとき、武子は凛とした態度でこれを叱り、一步も退かなかったというエピソードが伝えられています。武子の声は威厳にみちて、実際、金鈴を振るような美しい音声をもっていたそうです。人々が「金鈴夫人」と呼んだというのも無理はないのです。美しく優雅な武子が言葉が発するとき、信徒たちは心から武子を崇めたといえます。

『無憂華』は武子自身の装幀で、自筆の色紙や自画像も入っており、その文章の味わいも、深く落ちついた慈味ももっています。文も絵

も文字も巧く、容姿美しく、性質もすばらしいこの佳人は、あの岡本かの子をさえ敬服させるふしぎに穏やかな魅力ももっていました。『無憂華』はたちまちベストセラーになり、七月発売の本は八月に六版、九月に



最後の写真（昭和3年1月）

十九版に至るハイペースで増刷されています。

その武子が風邪をこじらせ、扁桃腺の切開の予後、歯の炎症を起し、抜歯後敗血症を起して逝去したのは、昭和三年二月七日のことでした。ひとえに、過労の重積が回復力を奪ったのです。骨髓骨膜炎という、烈しい痛みの中で、武子はじつに平静に自らの死に對い、最後まで人々にことばをかけ、称名（仏の名号）を唱え、従容として死んでいったと伝えられます。

『無憂華』は、いつそう売れ行きを増しました。多い時には一日の内に四版を刷るということさえありました。世の人々は挙げて武子の死を悼んだのでした。武子はすでに自らの印税を全部投じて、貧しい人々のための診療所を作っていました。良致への遺言は、「私が居なくなってもあの診療所だけはどうか盛んになるようにして頂戴」というものだったといえます。

武子は生前、大震災によって詠草を全部失いましたが、以前雑誌に発表した作や、その後の作を自ら集めてあり、『薰染』という名もつけられていましたので、師佐佐木信綱の手で、病中の歌、追悼記などを加え、遺歌集『薰染』が刊行されました。

弱きもの美しきものかくあれと云はまくほ

しみ散りちるうばら

ただひとりうまれし故にひとりただ死ねと

しいふや落ちてゆく日は

風ふけば風のまに／＼雨ふればぬれ／＼

ぞ立つ寂しきしたがひ

きえずてあれなき世の後も我といふ者の遺せる一すぢの跡



全国各地へ仏教婦人会活動を奨励。

前著『金鈴』に比べるといづらか観念的でおだやかな傾向があり、また死の予感を思わせる歌もいくつか入っていて、多忙の中に自らの体の衰えを知っていたのであろうと察せられるところがあります。武子は歌人としてよりも仏教人として生きることにはつきり重点を置いて活動していたようにも思えるのです。短歌に対する無欲さのようなものが、このあたりには見えていないように思います。

没後翌年の昭和四年には、姻戚に当る歌人吉井勇の編による歌集『白孔雀』が刊行されました。更に佐佐木信綱編の『九條武子夫人書簡集』が同じ年に刊行されて、ここにも歌が入っています。こうして、没後直ちに作品があつめられ刊行されたところにも、周囲に在った人々の、九條武子への哀惜と追慕の情の深かったことが窺われます。

大地震は昨日のまがごと夕ばえの今日の鎌倉なにごともし

しのぶこと思ふことあまりしげければ月も  
ひと夜は曇りてあれな  
夢ならず白き孔雀が夜の舞にわが魂さそふ  
コスモスの花  
うつそみの人の愁はしみじみと薄の穂より  
生まるるものか  
うつくしきものの眠りをつつむごとあかし  
やの森は涼しかりけり

流麗な調べのなかに、どこか消し去れない憂愁の影があつて、読  
む人の心にも静かな愁いを誘うようなところがあつて、一種の「九條  
武子調」ともいふべき文体が出て来ているのに気づきます。作品年  
代は大體、震災以後から昭和初年にかけてのものですが、その歌風は、  
当時の女流歌人たち、三ヶ島霞子、原阿佐緒、柳原白蓮、四賀光子、  
若山喜志子、今井邦子、岡本かの子、それらの人々のどれとも異な  
つた、いわば清らかな格調のようなものを保っているのです。それ  
は才華に恵まれた佳人のはからずも負つた「十年の孤り居」とい  
ふ試練によつて購われたものなのかもしれませぬ。

また、九條武子は、身近な共感や卑近な同情を感じさせる歌人で  
はないとも思えます。

身のきぬを心のきぬを幾重かけからうじて  
我人にまじらふ

美しき裸形の身にも心にも幾重かさねしい  
つはりの衣

と歌う武子には、宗門の象徴として、身を挺して布教に、救済に尽  
す使命をこなすためには、常に人から求められる像に合わせてふる  
まわねばならない、その苦しさがつきまといつたのかもしれない。

百人のわれにそしりの火はふるもひとりの  
人の涙にぞ足る

という諦念に似た思い切りが、多くの苦痛を耐える強さを支えてい  
たようにもみえます。武子にとって、短歌はひとつの心の安全弁で  
あつたとも思われるのです。

ちりぢりにわがおもひ出も降りそそぐひま  
なく花のちる日なりけり  
さくら花散りに散るかな思ひ出もいや積み  
まさる大谷の山

京都東山の太谷、親鸞聖人の廟のそばには、武子の生母円明院の  
隠居所がありました。過労のあげく暫く療養したときの、こうした  
歌をよむと、武子の故郷はやはりさくら散る京都であつたのだ、と  
その安らぎに思わずほっとした思いを抱かずにはいられません。

(おざき・さえ) 「運河」運営委員